高校生新書 15

# 高校チャンピオン

山本　洋著

山本　洋
やまもと　ひろし

1932年　滋賀県に生まれる
1954年　京都大学文学部国文学科卒業
現　在　滋賀県立大津高校教諭
著　書　『高校生手帳』IV共著（三一書房）
『女子高校生』（三一新書）
『日本の恋人たち』共著（高校生新書）
現住所　滋賀県滋賀郡堅田町本堅田1530

高校チャンピオン　定価 230 円

1965年4月5日　第1版発行

著　者 © 山本　洋
1965年
発行者　竹村　一
印刷所　暁印刷株式会社
製本所　本間製本株式会社

発行所　株式会社 三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話東京 (291) 3131～5番
振替東京 84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　高校生新書 15

# 高校チャンピオン

山本　洋著

高校生新書
三一書房

# 高校チャンピオン　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第一章　デイトか練習か……9
1　心臓破りの丘
2　交際のはじまり
3　暗い疏水
第二章　敗　北……39
1　スランプ
2　くやしい思い
3　孤独なランナー
4　エースと補欠
第三章　止めっちまいたい！　クラブなんて……82
1　迷いの層
2　川沿いの応援
3　ゆがんだ顔

4　優勝カップ
第四章　ファイトを燃やせ……126
1　夜の病室にて
2　〝根性なき者は去れ〟
3　スクール・アマチュア
4　除名
第五章　全国大会予選……175
1　おそい帰り道
2　スポーツ批判
3　五月の午前の光
あとがき……211

小説　高校チャンピオン

B新聞S県版が、昭和三九年一月、三三回にわたって、県下の高校ぜんぶを紹介したことがある。それは、高校生の急増でたかまってきた世間の関心にこたえようとした企画であった。S県立坂田高校は、その「高校あんない記」なる記事によると、こう書かれている。

「明治四〇年四月に県立坂田高女として開校された。前身が女学校だけあって、げんざいの生徒総数一一八三名のうち、男子が四七九名、女子が七〇四名と、女子が二二五名だけおおい。（中略）

女学校から戦後、男女共学にうつりかわってきているなかで、普通課程が三一年にほっそくし、げんざいは普通・家庭の両課程。進学を主とし、スポーツ尊重をもかみあわせた『学習とスポーツ』指導が、あたらしい校風としてつくりあげられつつある。（中略）

弓道部は、三四年から五年連続で、国体、近畿大会に出場、全国高校弓道選手権にも四回、県代表として出ている。野球部もつよく、昨年夏の県大会では優勝し、地区予選では、名門H高校と接戦し1対0でまけたのがおしまれる。

女子のボートは県下でただ一つのユニークな存在であり、三三年に国体で優勝したほか国体出場の回数もおおい。

体操は女子が県大会に連続優勝、ソフトボール、排球が同一位、柔道、バスケット、庭球、卓球が同二位、さすがにクラブでのめざましい活躍をしめしている。（以下略）」

坂田高校は、高体連の春・秋の総合体育大会には、なんども優勝している。

ちなみに、S県の高校スポーツの水準は、二、三の例外はべつとして、全国的にひくいほうである。

# 第一章　デイトか練習か

## 1　心臓破りの丘

五月の空は、ぴちぴちと青く澄みわたっている。四月のようになま暖かい甘ったるさがない。六月のようにべたべたくっつくなれなれしさがない。目のまえの空気をパチンと指ではじくと、青空のいちばん深いところでさわやかな音がきもちよく反響するようだ。

城しん子はかなり疲れていた。頂上の展望台の銀色にひかる円屋根だけが見えていて、ドライブ・ウエイは大きく迂回し山腹に消えている。このドライブ・ウエイは、人も歩けるのである。

「よけいシンドイわねえ、もう少しだとおもうと。」

「ファイト、ファイト！　ファイトォッ！　っていうとこね。」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

いっしょに歩いている親友の久田重代が、息をはずませて答えた。ふたりより先には、勢いのよい三年の男子がなん人かいるだけで、女生徒はだれもいないはずである。

二車線のKドライブ・ウェイは、まがりくねって登り坂になっている。ここをてんでに高校生たちが歩いてゆく。列なんてとっくにくずれている。S県立坂田高校の全校遠足なのである。

男子も女子も、もうかなり疲れている。午前九時にM神社にあつまり、その境内から尾津市の西にむかってP峠をこえ、葉桜のトンネルをくぐりながら清流にそって歩き、Z市の郊外の住宅街をとおりぬけ、車のはげしく行きかう国道をよこぎり、東海道線の踏みきりをわたり、K山のすその急傾斜の小道を木の枝につかまってよじ登り、石ころ道に足をすくわれ、そしてようやくこのドライブ・ウェイに出てきたのである。一五キロぐらいあるであろう。

すでに正午をまわっている。

「ほかの人たちは、だいぶ後ろねえ。」

「なん人ぐらいいるかしら、先頭には？」

そういいながら、城しん子は脱いでしまったカーディガンを持ちなおした。あたたかい日ざしで汗ばむのが、五月の野外では快よかった。

「こんなの、着てこなけりゃよかった。」

「ほんとよ。あんたは、おしゃれしようとおもうからよ。」

城しん子は、坂田高校卓球部の女子主将である。髪はうしろをみじかく刈りあげ、しなやかな体は、いかにもきびきびしている。目じりにしめされた勝ち気さは、ふっくらした唇と、どことなくそぐわない。そぐわないといえば、顔ぜんたいのはきはきした明るさにたいして、眉根のあたりの暗さが気になる。

久田重代は、女子ボートの選手である。大がらな体つきで、顔はもうすでに日にやけている。目がくりくりして、よくうごく。

ふたりとも、ふだんの練習で、かなりきたえられている。といっても、とちゅうで小休止しただけで、すでにもう三時間以上も歩きつづけている。その上、しん子は、べんとうや夏みかんや菓子類のはいったナップザックに水筒とカメラをもち、脱いだカーディガンをうでにかけている。

ふたりは、男の子にまけぬように早く歩いて、三年生三五〇人のなかで先頭きって頂上に着こうとしているのである。

「こんなくだものなんか、すてちゃおうかしら。おもくて、おもくて。」

「すてちゃえ、すてちゃえ。……どうせ、ひろった、恋だもの、くだもの。」

「いやぁな、お重。」

「すてた夏みかん、あたし、ひろうわ。だぁい好き、夏みかん。」

「そこを曲がると、もうすぐなんじゃないかしら。あら、うしろ、だれか来るんじゃない、男の子たちが？」
「さあ、追いつかれないように。」
二、三〇メートルほどうしろから、四人づれの男子生徒が、声をかける。
「きみらぁッ、すごく早いんだなぁッ。」
しん子と重代は、小声で、
「ほっといてサッサと行きましょ。」
とうなずきあい、にじみでてくる汗をぬぐって、足をはやめた。
そのとき、背後で、駈けてくるズック靴の音がするとともに、わあッという四人の歓声があがった。
「いいカッコ、すんなよおッ。」
それにかまわず、その足音は、四人をぬいて、しん子と重代にせまってくる。妙にだらしない、スリッパをひきずるような足音である。
「だれか走ってくるわ。シャクね、追いぬかれたら。」
ふたりはうしろをふりむいた。坊多四郎であった。坊多は異様なかっこうをしていた。女生徒のだとおもわれる色とりどりの、ナップザックやバッグや水筒やリュック類を七つ八つも、

一メートル七八の長身の首やうでにひっかけ、あるいは手にひっつかんでいる。うしろの四人組からヤジがとんだ。
「女の子の荷物ばかり持ちやがって。」
「モテてモテてコマルな。坊多！」
坊多四郎は、上唇がわずかにめくれているような口元をにやりと笑いくずし、いま追いぬいた四人をふりむいた。
「バァカめ！　てんでちがうんだあッ。こちとら、もたされて、もたされて、コマってんだ、お荷物をね。」
「チッ！　バカにしてやがる。」
「へへへッ、そこ行くダレカさんが怒るぞ。」
城しん子は、歩きながらツンとした。久田重代が、クックックとしのび笑いで、しん子の白いよこ顔をうかがう。しん子は、大きい声でわざと聞えよがしにいった。
「しっかり歩きましょ。ベスト8に入れないわよ。」
それは、先頭の八人以内に頂上につくことを意味しているのである。坊多四郎は、そこではじめてしん子だということに気がつき、ハッとした。坊多は走るのをやめて歩きだしながら、うしろにことばを投げた。

「おれの昼めしとオヤツは、このお荷物の運ばん料さ。わりがよくてねえ、フィフティ・フィフティなんだ。」
これは、しん子にきかせる意味もある。
「英語もロクロクできねえのに、フィフティ・フィフティだとさ。がめつい野郎だ。」
四人のそんなささやきをあとに、坊多は、しん子と重代に追いついた。
「ラスト・スパート、ラスト・スパート！　そうしなきゃ、ベスト8はむりだな。ここは〝心臓破りの丘〟ってとこだからな。」
坊多は、そのままふたりを追いぬいていこうとした。しん子は、ちょっと機嫌をそこねた。
〈坊多さんって、しらない！　無神経なのんびり屋さん！〉
「坊多さん！　しん子がこんなに……。」
重代がいいかけるのを、しん子は手で制した。
「いいのよ、いいのよ。」
坊多は、やっと気がつき、
「あっ、そうだね、荷物もってあげようか？　まだまだもてるから。」
と、一〇歩ほど追いぬいた所で立ちどまった。
「もう、けっこうよ。すぐ頂上ですからねッ。」

「そうだろうな。ふたりともS県トップ・レベルの運動選手だからな。こんなぐらいでへたばってちゃねえ。うしろのほう、行ってごらんよ、気分がわるいって、青い顔した女の子がゾロゾラいらあ。」

坊多が知っている実さいの数は四人であったが、サバをよんで大げさにいったのである。

トップ・レベルといわれて、いささか機嫌をなおしたしん子は、それでもうわべだけはとりすまして、いった。

「どうぞ、お先に。だけどここは〝心臓破りの丘〟じゃなくってよ。〝冷たい心臓の丘〟っていうところね。ご存知？」

坊多四郎は、その皮肉がわかったのかどうか知らないが、走るたびに跳ねあがる荷物のはでな色彩を両手でおさえながら、ふたたび駈けだしていった。その足は、かかとをわざと踏みつぶした新しいズック靴をひっかけている。だから、妙にだらしない靴音になるのだった。

しん子と重代は、それを見て、おもわず笑った。一〇〇メートル一一秒九と評判されている坊多の快足もだいなしである。

城しん子は、うしろ姿の見えなくなってしまった坊多の顔をおもい浮かべた。ほお骨からひき緊った感じであごへ流れる線、いつもそこぬけに明るい微笑をたたえた表情、どことなしにお坊っちゃんふうでいて、しかもファイトのある人。坊多に接すると、なごやかさと明るさと



此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton